

テキスト	創世記 1章1節～2章3節
子どもカテキズム	問12, 15, 37
参照教理問答	ウェストミンスター小教理問答 問1, 9～10 ウェストミンスター信仰告白 第4章

初めに天地万物をつくられた神の御業を私たちは「創造」と呼びます。「創造」という語は一般的にも「創造的(クリエイティブ)な仕事」などと用いられますが、教会では聖書に由来するキリスト教教理の術語です。ヘブライ語聖書の「創造する(バーラー)」という動詞の主語は神にしか用いられません。人間や何かモノを「創造する」ことはできないのです。

通常、創造は全知全能の父なる神の働きに帰されますが、そこをウェストミンスター信仰告白は慎重に父・子・聖霊の三位一体の神の働きであるとしています。御子なるキリストによる創造とはイメージが難しいかもしれません。しかし、「御子による創造」という教えは参照聖句にあるように新約聖書のヘブライ書1章2節やコロサイ書1章16節から与えられます。キリストによる創造の意義は、イエス・キリストが永遠の昔から神の子であったことを保証し、御子が父と同じ権威をもつ神であることを指し示すところにあります。御子による創造は父の創造と異なるわけではありません。また、聖霊による創造については創世記やヨブ記の参照聖句をご覧ください。要点は、創造は三位一体の神がそれぞれに関与しながら果たされた行為だ、ということです。

ウ告白は聖書の重要な教えである「言葉による創造」に触れていませんが、参照聖句をみればヨハネ福音書1章2節3節が挙げられています。この教理の重要性は、創造と救いとの関係にあります。初めにすべての存在と生命を創造した神の言葉が、キリスト・聖霊・聖書を通して、今も私たちの内に新しい命を造ります。

創造の目的は、神ご自身の栄光のためです。被造物の上に、神の永遠性、力、知恵、慈しみが現れる時、そこで神の栄光が知られます。「それは、極めて善いものだった」といわれるように、神が

「善いもの」を造ろうとされたということ以外に、私たちは創造の動機も目的も知ることはできません。そしてローマ書でパウロが言う通り、私たちは罪に捕われているために、神の創造の素晴らしさを神の栄光に帰することができず、それを感じ取ってもそのまま自然や人間を拝んでしまう性質をもっています。「何故、神様は世界を造ったの?」「何故、神様は私を造ったの?」という根本的な質問への答えは、神が善いものを造られたという他には説明することができません。

神によって創造されたのは「天地とそこに生きるもの」とですが、教理から学ぶ天地は「空と大地」ではなくて、見えるものの世界と見えないものの世界です。天使は見えないものの世界に属します。また、「万物」とはモノに限りません。ありとあらゆる存在のすべてが被造物です。ですから神に等しかったり、神を超える思想などありえません。

「無からの創造」はこれに関係しています。「無」とは何か、という禅問答とは別の関心です。私たちは神の創造以前に立ち入ることはできない、という創造者と被造物の間の断絶が、この「無」ということの中に現れています。神がすべての源であって、神が万物の創造者です。

すると、罪や悪、サタンもまた神の創造かという理屈が成り立ちますが、そうではなくて、神の創造は全くの「善き創造」です。創造とは与える行為です。神の創造に悪意は存在しません。罪は第一に人間の背きに原因があります。創造時の祝福を破壊したのは人間の責任です。私たちはそのような罪の悲惨の中にありながら、神が万物の創造者であり、その最初の祝福を取り去らないで救いの計画をもっておられると知ることは、私たちににとって大きな慰めです。私たち自身も世界もともに「神のもの」と知ることは、現代の世界にとっ

ても緊急の必要であるはずで、自分で確信するのと同時に、創造者である神を世に対して告白するのも私たちの大切な役目です。

人間の創造に関する聖書の教えについては、まず、神が人間を造られたのは他のすべての被造物が造られた後だ、ということが挙げられます。それは人間の創造が天地創造のクライマックスをなし、人間が生まれる前にそのすべての必要が整えられていたことを指します。厳密に言えば、聖書は人間の創造を必ずしも最後の段階としてはいません。創世記1章の記述によれば、神が6日目にお造りになったのは、陸の獣と人間、そして植物という順序になっています。また、2章の記述に従えば、まず人間が土から造られて、その後、彼のパートナーとして動物たちが造られます。ですから、「最後の創造」はその価値を表すものであって、人間が神のかたちを賦与されて、全被造物を治めるよう地上に「派遣される」ことへと結びつきます。人間が造られてようやく神の創造は完成し、被造物全体に神の祝福が満たされます。

創世記2章から読み始めると神が最初に造った人間はアダムのようですが、創造の秩序を語る1章では「男と女に創造された」とあります。ですから、男女の性別は創造に基礎付けられた基本単位で、三位一体の神が決して孤独には存在されないように、人間は決して一人孤独に造られたものではありません。人間は初めから社会性を持ち、人との交わりをもって地上に置かれました。この詳細は創世記2章に引き継がれて語られます。

聖書における「魂（ネフェシュ）」という用語は肉体と靈魂とを分離して考えるギリシャの人間観とは異なって、人の全人格を総合的に捉える言葉です。人間は塵から造られた肉体でのみ存在するのではなく、神が与えた精神性を豊かに備えています。肉体と精神という二つの側面から人間の全体を捉えるのが聖書の人間観であって、本来神の属性でしかない「不滅性」は、この精神においてのみ捉えられます。理性的で、不滅性を帯びた靈魂は、神の不滅性を捉えうる優れた精神、とし

てよいと思います。

人間の創造という教理において最も重要なのは「神のかたち」における創造という教理です。ここには解決の困難な問題があって、そもそも外形的な「かたち」を持たない神の「かたち」とは一体何かということ、それ故に、この教理には多大な議論が費やされています。ウ告白では、これをパウロの言葉遣いを用いて「知識と義と真のきよさ」という人間の内面性に当てはめています(コロサイ3:10, エフェソ4:24)。しかしパウロが述べる「知識と義と聖」はキリストに贖われて聖霊を宿すようになった「新しい人」の属性です。従って、「神のかたち」は本来創造の時点で人間に与えられていたものの、墮落によって失われてしまった真の人間性であるといっただけでしょう。そして神の子キリストにおいて私たちは「神のかたち」を知らされ、聖霊によってその真のかたちを回復させられます。墮落したとは言え、すべての人間は神の似姿をもつ故に、その命の尊厳は最高度に尊ばれます。これは聖書が教える倫理観の要になる教理として覚えたいところです。

パウロはローマ書2章14節以下で「心に記された神の律法」と人間の良心について述べていますが、これも「知識・義・聖」という神のかたちに含めて考えることができます。創造の時点で人間は、その心の律法に従う能力をもっていました。それは神が人間に与えた、意志の自由と関わります。人間は、自由な意志で神に従うことができると同時に、その自由を用いて神に背くこともできました。これは人間の創造についての神の特別なお考えと言わざるを得ません。さらに、神は人に心の律法ばかりではなく、外部に定めた掟をも与えました。「善悪の知識の木」から食べてはならない、という命令があり、この掟の下に人間の側からの積極的な服従が表示されていました。この秩序の下に、創造時の人間の幸福が示されています。ここには、本来あるべき人間の初めが描かれていると同時に、そこへと回復される終わりがあります。(牧野信成)

テキスト 創世記 1章1節～2章3節  
子どもカテキズム 問12, 15, 37

### 〔単元のねらい〕

善き創造はキリスト教的世界観の粋ですが、どのように子どもたちにこれを語り継ぐのが教会の課題です。進化論との対決でのみ創造を教えるのは聖書の啓示に対する理解を欠きます。創世記1章の記述を、神の喜びを感じ取りながら、一日一日ずつを絵本をめくるように語ることができれば素晴らしいと思います。大切なのは、創造という出来事から神の愛を信じることです。

## よい世界をつくったよい神さま

今から130億年程前に光の玉が爆発して宇宙が誕生したと言われます。ものすごく大きな電子望遠鏡が作られて、それで宇宙の広さを測るとそんなこともわかってくるのだそうです。不思議なことに聖書も宇宙の始まりには光があったと書いています。真っ暗闇の中に目も開けられない程の眩しい光が現れて、その光が爆発の力で広がって、たくさん星が生まれました。

でも、聖書が書いていることはちょっと違っています。「初めに、神は天地を創造された」とあります。望遠鏡で宇宙を調べても、誰が光の玉を用意して、誰がそれを爆発させたのかはわかりません。実際にそれを見た人は誰もいませんから、コンピューターで計算して、宇宙が生まれたのがどれほど昔か計ってみただけです。ただ聖書には、神さまが天地を造ったと書いてあります。「天地」とは宇宙の全体のことです。

明るい太陽の光が差し込む中に、私たちが住んでいる美しい地球も生まれました。神さまはそこにたくさんの生命が宿ることができるように、一つ一つを準備してゆかれます。明るい昼の時間には、あとで植物や動物が太陽の光をいっぱい浴びて元気になることができるようにしました。夜の時間にはみんなが静かに眠ることができるように小さな月が暗闇を照らすようにしました。地球は空気に包まれて生き物が呼吸できるようになり、青く明るく輝く大空と、青く深く輝く海がわかれて、その海のなかに渴いた大地が造られました。

陸には草や木が生まれました。湿ったところにはコケが生まれました。草や木は種を飛ばしてどんどん仲間を増やして、広々とした草原や深い森になりました。中には美味しい実をつける木もありました。海辺のヤシの実には甘いジュースが密かに隠れていました。

こうして食べ物が十分できてから、神さまはその大空の中を自由に飛び回るように鳥を造りました。また青い海を自由に泳ぎ回ることができるように魚を造りました。もちろん、イルカもクジラも、イカやタコもいたはずです。陸にも色々な動物たちが造られました。今はもういなくなってしまったティラノザウルスやマンモスもいました。蛇やワニやゴキブリも元気に地上を這いずり回っていました。神さまはご自分のお造りになったすべての生き物にむかって、「命を生みなさい、増え広がちなさい」といって、そうすることができるように祝福を与えました。神さまの言ったことはすべてその通りになります。「光りあれ」といったらその通りになったように。すべてのものは神さまの言葉によってつくられます。

そしていよいよ最後に人間が造られました。神さまは人間を男と女にお造りになりました。人間もまた他の動物と同じように増え広がっていくために、そして、男と女が互いに助け合って生きていくために、神さまはそうしてくださいました。人間が最後に造られたのには特別な意味があります。神さまは人間をご自分に似せてお造りになり

ました。もちろん、神さまには体はありませんから、目に見えるかたちはもっていません。けれども、人間は神さまと似ていますから、神さまの言葉がわかります。神さまの心がわかります。それで、神さまに代わって大事な仕事をすることができます。その仕事とは、神さまのお造りになった大切な地球とその中で生きているすべての命を守ることです。

こうして最後に人間が造られて宇宙は完成しました。太陽の光を浴びて青く輝く地球と、その中にいっぱい満ちている生き物をご覧になって、神さまは喜んでこう言われました、「ほら見てご覧、なんて素晴らしいんだ」。創造の完成をお祝いして、神さまはその日をお休みにしました。

私たちが生きているのは、神さまがお造りになった素晴らしい世界です。それがどんなに美しくってどんなに不思議なものか、もしまだ気がついていなかったら、どうぞ見にってください。神さまが「見てご覧」と言っていますから。高い山に登れば、どこまでも続く山並みに夕陽に染まった雲がかぶさり、日が沈むにつれて反対側から明るい月が一番星を連れて上ってくるのに出会います。海に潜ってみるのもいいかもしれません。私には経験がありませんけれども。海の中で一番数が多い生き物はイカなんだそうです。普段は深いところにもぐっているのですが、ときどき上の方に浮かんで来て、ぼうっと光ります。そうすると、空から見ると暗い海がぼんやり光っているのがわかるのだといいます。もっと不思議なのはイカの眼です。体は単純そうに見えますが、イカの眼は人間に近いぐらい精巧にできているのだそうです。暗い海の中において体もふにゃふにゃで難しいことはできそうもないのに、何でそんなに眼が発達しているのかよくわからないと学者が言っています。神さまがお造りになった世界は不思議に満ちています。遠くに出かける必要もありません。道ばたに咲いている花を注意深く観察してみてください。また、草花に寄って来る虫をよく見てください。生きているのがとても不思議に思えて来ます

から。

でも、残念なことに私たち人間は、この素晴らしい世界を大切にしません。もっとお金が欲しいから、便利なくらしがしたいからといって、どんどん木を切り倒し、工場を造って空や海を汚します。鳥や動物たちは住むところが無くなって、数が減っていってしまいます。そうなれば、人間だって生きづらくなってしまふのに、それがわかっているのに、大切な地球を守ることができません。何故ならば、それは人間が、神さまに造られたことを忘れてしまったからです。人間が神さまに背いて世界も悪くなった、と聖書が教えてくれます。

たとえ人間がどんなに悪くなくても、私たちの住む地球が汚れてしまっても、神さまの造った素晴らしい世界は、まだ、生きています。神さまが世界に与えた祝福の力も、まだ、働いています。人間には、この大切な地球を守る仕事を与えられた、と言いました。その仕事も、まだ、終わってはいません。神さまは、罪を犯した私たちを見捨ててしまったわけではありません。だから、イエスさまが来て、私たちが神さまの恵みに気がつくように、十字架にかかって死んでくださったのです。そして復活して、神さまの力を教えてくださいました。神さまは、ご自分のお造りになったものすべてを、まだ、愛し続けておられます。

だから、私たちは神さまがお造りになったすべての良いものを大切にしたいと思います。自然を守るのも、人間を守るのも、神さまがお命じなったことです。それは、世界が神さまの祝福を受けて幸せになるためです。人間が特別なかたちをしていて、神さまの言葉と心がわかるようにされたのは、人間にしかできない大切な仕事があるからです。神さまは私たちに食べ物も着る物も住むところもすべてを与えてくださいますが、それで世界を壊していいとは言っておられません。みんなと一緒に生きて、神さまの素晴らしさをあらわすことができるように、自分自身のことも他の人のことも、鳥も魚も動物も、すべての命を大切にしたいと思います。(牧野信成)

---

[今週の暗唱聖句] 創世記 1章31節

神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。

---

〈ねらい〉

宇宙、そして人間が住む地球とそこにあるすべてのものを「良いもの」としてお造りくださった神さまの愛を知り、喜びます。

〈お話〉

真っ暗で、まだ何もない時、神さまは「光あれ」と言われました。すると、明るい、暖かい光が、誕生しました。このようにすべてのものは、神さまの言によって造られたのです。夜は、「早くおやすみなさい」と、小さな月の光が照らす静かな暗やみをおあたえくださいました。ぐっすり眠っている間に、子どもは毎日少しずつ体が大きくなります。

広い空、青い海、野原も山もお造りくださいました。そこで、ぼくたち・わたしたちは、走ったり、転がったり、飛んだり、元気に遊んでいますね。

草や木、きれいな花や、わたしたちの体に必要

な野菜や果物、おいしい空気も水も神さまは、ちゃんと用意してくださいました。

空を飛ぶ鳥、海の中を泳ぐ魚、地に住む動物……そしてそれらの生き物と、仲良く助け合って暮らすようにと、神さまは、人間をお造りになりました。

神さまが、お造りになったすべてのものを見る時、神さまがどれほど、ぼくたち・わたしたち人間のことを愛してくださっているかよくわかります。

〈暗唱聖句〉

「神はおつくりになったすべてのものをごらんになった」  
(創世記1:31)

〈さんび〉

『かみさまにかんしゃ』85番

(「こどもさんびか」日本基督教団出版局)

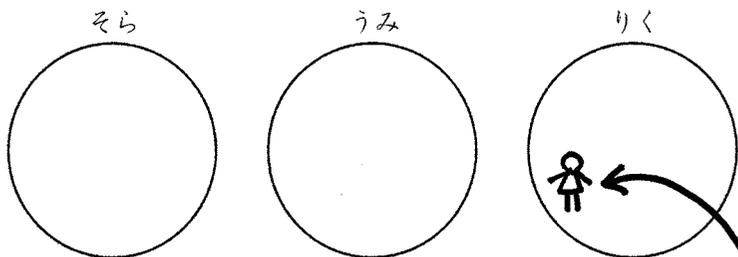
①「天地創造」に関する絵本(紙芝居)など見ながら〈お話〉をします。暗唱聖句を覚えます。

②ゲーム:「そら・うみ・りく」

・地面(床)に1~2mほどの円を3つかいて、それぞれを「そら」「うみ」「りく」とします。  
(室内の場合は、ロープなどで輪を作って、床に置きます)

・子どもたちは円の外に立ち、教師が、鳥の名前(例:スズメ)を言ったら「そら」の円に入り、動物や植物の名前(例:ネコ・リンゴ)を言ったら「りく」の円に入り、魚の名前(例:クジラ)を言ったら「うみ」の円に入ります。

\*空・海・陸にすむ生き物と、人間が、仲良く助け合って暮らすように、神さまはすべての「良いもの」をぼくたち・わたしたちに、与えてくださったことを感謝します。



対話の手がかりとして……。

①なぜこの世界が存在し、その世界に私が存在するのか。そんなことを一度は考えたことがあるのではないのでしょうか。特に、辛い出来事を経験したり、自分の将来について真剣に考え始めた時、どうしても自分の存在の意味を問わずにはおれないと思うのです。そのような時、聖書の最初に記されている天地創造の物語は、私たちに大切なことを教えてくれます。

②創世記の最初の部分に記されている「天地創造」の物語は、誤って読まれることがあります。それは、世界はどのような経緯で出来上がったのかということです。確かに宇宙や世界の成り立ちについて知ることは大変興味深いものがあります。でも残念ながら、聖書はそのような意図で、天地創造の物語を記してはいないということです。大事なのは、あなたが存在する意味を教えているということです。

③もし世界がよく分からない不思議な力によって誕生したのなら、そこに存在する私たちもよく分からないまま、ここにいてということになります。偶然に、たまたまここにいただけなのです。もしそうだとするならば、自分の人生に意義付けをするのは、あなた自身です。要するに、あなたの力や知恵によって、自分の人生を意味あるものにしなさいということになるのです。そしてそれができない人はダメな人間と見なされてしまうのです。あるいは、このように考える人もいるでしょう。自分はいてもいなくてもどっちでもよかったのだ。たまたまここに

いるだけなのだからと、空しい思いに囚われることもあるでしょう。

④でも聖書は語ります。この世界を造り、あなたに命を与えたのは神なのだ。あなたはたまたまそこにいるではありません。自分の力によって、自分の人生を築き上げていく必要ありません。大事なのは、「光あれ」とおっしゃった神の言葉に耳を傾けることです。そこで聞こえてくる言葉は「極めて良かった」と喜びと満足を表しておられる神の声です。あなたは、自分のことをどう思いますか。好きな部分もあれば、どうしても見られたくない嫌な部分を知っているかもしれません。自分が生きている意味すら見失うこともあるでしょう。でも、あなたがここにいてくれとも良かったといってくださる方が、最初からおられるのです。この喜びの音色があなたの人生の中で消えることなく鳴り響いています。

⑤たとえ、自分のことを心から愛することができなくても、あるいは、罪に苦しんでいたとしても、神様は、今、イエス・キリストの十字架をおして、あなたを見ていてくださいます。あなたは神に愛され、赦されている存在です。混沌とした闇の中に光を造り出してくださったように、あなたの中にある闇に神は必ず光を与えてくださいます。いや既にその光が与えられているのです。どうか、神様の言葉を聞き続けてください。神様のために、あなたが用いられることを祈り続けてください。神様は祈りに答えてくださり、具体的な道を示してくださるはずですよ。